

O1-001

小・中学校のがん教育に対して養護教諭が捉えている課題－養護教諭のがん教育実践を通して－

村田 久実、中北 裕子

三重県立看護大学

【目的】

我が国では、1981年からがんは死因の第1位であり、学校現場においても2020年より小学校から順次がん教育の全面実施が始まっている。医学的素養をもつ教育職である養護教諭の存在は重要な意義をもつといえるが、養護教諭に実施意欲があっても携われていない現状等があり、思うように関わっていないと考える。よって、養護教諭が小・中学校におけるがん教育の実践を通して捉えている課題について明らかにすることを目的とする。

【方法】

小・中学校のがん教育に関わったことがある教職経験6年次以降の養護教諭6名を対象に、半構造化面接を実施し、質的帰納的に分析した。インタビュー内容から逐語録を作成し、がん教育に関わる養護教諭の悩みや問題を読み取りコード化し、サブカテゴリー、カテゴリーを抽出した。三重県立看護大学研究倫理審査会の承認を受けて実施した（通知番号240102）。

【結果】

85のコード、31のサブカテゴリー、8つのカテゴリーが抽出された。養護教諭は【がん教育の専門性に対するハードルの高さ】に直面し、養護教諭と他の教員の【がん教育における役割認識のずれ】やがん教育を実施する際の【多岐にわたる配慮に関する負担感】も課題として捉えていた。また、【学校現場のがん教育に関する情報の共有不足】を認識し、【他の教員との調整における負担感】や【外部講師の活用に伴う調整や手続きにおける負担感】をもっていた。

【考察】

児童生徒へのがん教育に対する養護教諭の戸惑いについては、養護教諭自身が、研修や既存資料などを通じてがん教育の実施方法や具体的な配慮の仕方について理解を深め、必要に応じて外部講師を活用しながら進めていくことが大切であると考える。学校現場におけるがん教育の浸透のしにくさは、研修の実施頻度の少なさ等により、がん教育に触れる教員の機会が限られ、実施へと進んでいないことが要因として示唆された。よって、養護教諭は、自ら得た情報を周知して教員各々のがん教育への理解を促し、養護教諭の役割や自らが担えることを他の教員に示してがん教育の実施に向けた後押しをすることで、がん教育の推進に繋がっていくのではないかと考える。加えて、養護教諭・管理職・教育委員会が協働し、がん教育において外部講師や先進事例等を活用しやすいシステムを作り、養護教諭はそれらを活かしながら、がん教育が円滑に行われるよう調整をしていく必要があると考える。

O1-002

養護教諭を目指す学生の発達障害児との関わりを通じた学びと課題－養成教育の在り方を探る－

西岡かおり¹⁾、辻 京子²⁾、滝川つばみ¹⁾、中岡 泰子¹⁾

¹⁾四国大学 生活科学部 人間生活科学科、

²⁾四国大学 看護学部 看護学科

【目的】

養護教諭の特別支援教育における役割は、2017年に文部科学省のガイドラインが見直され、「児童等の生活状況等を把握しやすい立場を活かした情報収集や障害のある児童等に対して寄り添った対応と支援」が追記された。養護教諭は、日頃の健康観察や保健室での関わりを通じて児童の生活状況を把握しやすい立場にあり、障害のある児童等への寄り添った対応と支援が求められている。そこで本研究は、養護教諭を目指す学生が発達障害児と関わる体験から得られた課題や気づきを分析することで発達障害児に対する養護教諭の役割を果たすための養成教育のあり方を検討することを目的とした。

【方法】

本研究では、養護教諭を目指す学生を対象に、自閉スペクトラム症（以下、ASD）の子どもとの関わりの経験を記録し、プロセスレコードを用いて振り返ることで、自己の課題や気づきを考察する機会を設けた。学生がASD児と関わる中で感じた困難や課題を整理した内容をもとに、養護教諭養成教育のなかでの工夫を検討した。

【結果】

学生は、発達障害児の特性に応じた関わりの難しさを実感し、個別の支援方法の重要性を認識した。特に、コミュニケーションの取り方や適切な関わり方についての知識不足を感じ、支援の具体的な方法を学ぶ必要性を強く意識していた。また、発達障害児の行動特性を理解することで、子どものニーズに応じた対応が求められることを認識し、関わりの工夫の必要性を考察した。一方で、限られた時間や経験の中で適切な関わり方を実践することの難しさを感じていた。

【考察】

この研究を通じて、養護教諭を目指す学生が発達障害児との関わりを理解し、適切な支援方法を学ぶには、まず発達障害の基礎知識を身につけ、その特性を理解することが重要である。さらに、実践的な関わりの機会を確保し、経験を積むことで、理論と実践を結びつけ、支援の力を高めることができる。また、プロセスレコードを活用して振り返りを行い、フィードバックを充実させることで、自分の関わりを客観的に分析し、支援の質を向上させることができる。

【結論】

本研究を通じて、養護教諭を目指す学生は、発達障害の特性理解と個別対応の重要性を認識した。実践的な経験を積み、振り返りを行うことで支援力が高まる。また、他職種との連携を意識し、理論と実践を統合した学びができるよう、教育内容の改善が求められる。